

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 16 日現在

機関番号：15201

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2015

課題番号：25780528

研究課題名(和文)国語教育におけるパターンランゲージを用いた課題解決方略の記述に関する研究

研究課題名(英文)A study for describe strategies using Pattern Languages in Japanese Language Education

研究代表者

富安 慎吾(Tomiyasu, Shingo)

島根大学・教育学部・准教授

研究者番号：40534300

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、国語教育の教科内容である言語行為を行うための方略についての記述方法を開発・検討した。本研究が採用したのはパターンランゲージという方法である。この方法の特徴は次の2点である。

1) 方略を実施する目的や環境・情報を含めて記述することができる。2) 記述された方略は抽象度が高く、また批判的に読む余地があるため、絶対的な正解とはならない。

本研究では、これらの特徴を実現する記述方法を検討するために、実際に記述を行い、完成したパターンランゲージを用いて教育実践を行うことで効果を検証した。その結果、パターンランゲージを用いることで言語行為についての省察を促すことができることが明らかになった。

研究成果の概要(英文)：In this Study, we have developed and researched how to write about strategies for the language act. What we adopted is a method of Pattern Languages. The feature of this method is the following two points. 1) Both the purpose and context of strategies can be described. 2) Strategies described by this method are not the only correct approach because they have a high level of abstraction and can be read critically.

We made some Pattern Languages in order to examine how to describe strategies. In addition, We tested Pattern Languages in educational practice. As a result, We established that we were able to encourage the learners to reflect on the act by Pattern Languages.

研究分野：国語教育

キーワード：教科内容 方略 省察 パターンランゲージ 実践知 学習観

1. 研究開始当初の背景

国語教育の教育内容の一部を構成する「課題解決方略」については、これまでも様々なそれを記述する試みが行われてきた。

しかし、「言語技術」や「能力表」などの既存の記述方法は以下の問題点を抱えている。

- (1) 「言語技術」は概念の規定が曖昧なままであり、その記述方法が定式化されていない。
- (2) 「能力表」は系統化には資するものの、記述内容が細分化され膨大になりやすく、実際に授業を構想する際には参考にしにくい。
- (3) 「言語技術」「能力表」とともに要素主義に陥りやすく、学習者が能動的に用いる方略になりにくい。

課題解決方略の記述方法については、国語教育における定式化がまだ見られず、また、その定式化の方法を対象とした研究もほとんど行われていない。数少ない研究としては、藤原顕[1989]がある。

本研究は、以上の状況認識のもとに、「課題解決方略」の記述方法の検討と、その活用について試行するものである。

2. 研究の目的

本研究の目的は、次の2点である。

- (1) 課題解決方略の記述方法について検討し、有効な記述方法を理論的に明らかにする。
- (2) 記述した課題解決方略について、その活用方法を検討・試行し、有効性について明らかにする。

3. 研究の方法

本研究では、課題解決方略の記述方法について、以下のように検討を行った。

- (1) 記述方法についての理論的考察
- (2) 課題解決方略の記述の試行
- (3) 記述した課題解決方略を活用した実践とその考察

本研究では課題解決方略の記述方法として、「パターンランゲージ」という手法に着目し、上記の方法での検討を行った。

パターンランゲージとは、元は建築家のクリストファ・アレグザンダーによって考案され、建築における課題解決方略を、建築家と利用者との間で共有するために用いられたものであった。

その後、パターンランゲージはソフトウェア開発の場において、暗黙知や経験知を共有するための共通言語として用いられ、現在は「学習パターン」「プレゼンテーションパターン」など、人間行動における課題解決方略を共有するための言語としても活用されている。

本研究は、このパターンランゲージを国語教育の課題解決方略の記述方法として理論的に位置づけ、その実際について検証するものである。

4. 研究成果

ここでは、本研究の成果について、先に述べた方法に即して述べる。

(1) 記述方法についての理論的考察

本研究では、国語教育における教科内容について、出来事概念を導入して検討した。

国語教育における教科内容の一部を構成する「課題解決方略」は、記述に際して、要素主義的な記述に陥りやすい。言い換えれば、その方略を用いること自体が自己目的化し、何のためにその方略を用いるのかがなござりにされやすい記述になっているのである。このことは、住田勝[2013]において、「学習者論の不在」(p.222)として指摘され、岩川直樹[2005]において、「目に見えやすい部分的要素にすぎないスキルの習得が、教育の目標そのものであるかのように扱われる」(p.226)として批判されている。

出来事概念の導入は、この課題を解決するために行ったものである。岩川直樹[2005]は、学習者が身につける力について、

具体的文脈における行為に表れる、自分のものになるプロセスをもつ、他者との関係や場のなかで成立する、固有の経緯や物語を持つ、他者のエンパワーメント場へのインパクトにつながる (p.239)

ものである必要を指摘している。また、岩川直樹[2008]においては、同様の趣旨から、「教育実践の「目的」は具体的な関係のなかで成立する子どもの姿や行為や出来事、一言で言えば、新たな関係の出来事の具現にこそ求められる」(p.10)と述べている。

この岩川の指摘や、松友一雄[2013]における「自分なりの判断に基づいて「言語パフォーマンス」を生起させることができる」(p.36)こと目標とすべきとする指摘や、行為の生起における環境情報の機能を検討するアフォーダンス理論等を理論的な背景として、本研究では国語教育における課題解決方略を出来事のパッケージとして記述することが有効であると考察した。

そこでは、以下の記述モデルを導入した。

環境との相互作用の中で諸アフォードンスにアフォードされて起こる 出来事を記述できること
 起こす 出来事 をいつ、どのように、何のために起こすのかを記述できること
 スタティックなものではなく、状況に合わせて記述を変更できる柔軟性を持つこと
 マクロな 出来事 からミクロな 出来事 までを記述できること

この記述モデルに即する記述方法として取り上げたのがパターンランゲージである。パターンランゲージによって表現されるのは、ある価値観に基づいて、「よいこと」として評価される 出来事 の群である。これらは、個々のパターンが相互に関連性を持つことで、ランゲージとしての体系性を持つことになる。

オープン思考		03
アイデアを発見するような話し合いがしたい		
発言をするときに		
自分のことはわからない 自分で思いついた意見は、自分にとっては当たり前のものであることが多く、価値判断がつきにくい。	自分の意見に自信がなく、思いつきの意見のように感じてしまう。	
完璧思考 人に意見を言うときには、その意見が整ったものでなければならぬと思いがち。		
背景	問題	
解決への示唆 人と話す中でこそ、自分の意見を深めていくことができる。		
そこで	自分の意見の強いつころもオープンにして、他の参加者にも一緒に考えてもらうようにする。	解決
たとえば	<ul style="list-style-type: none"> 自分の意見を言うときに、「……と思うのですが、——という部分は考えられていません」など、自分の考えの欠点と言える部分をオープンにするようにする。 質問されることを大切に、質問された点から、本当は自分はなぜ、何を言いたかったのだろうかと考える。 	
すると	アイデアが成長していくことを感じることで、完璧ではなくても意見を出す意味を感じるようになる。	結論
自分を知るためには、【共通点と相違点】を意識することが必要。【意見の下ごしらえ】をしておく、より自分の意見がはっきりする。【反対意見は最大の味方】であることも忘れずに。		

図1 話し合いパターン【オープン思考】

個々のパターンは次のように記述される。
 個々のパターンは、そのパターンがどのような 出来事 を起こすものであるかを表現する [タイトル] (【オープン思考】)のもとに、その 出来事 を起こす環境・状況を示す [コンテキスト] や [背景]、[問題]、具体的な 出来事 を示す [解決] や [方法] によって構成されている。
 個々のパターンはミクロな 出来事 もマクロな 出来事 も表現しうる。これらの 出来事 を相互に関係づけることで、課題解決方略を用いた言語パフォーマンスを状況に応じて形成するものとして表現することができる。

たとえば、「話し合いパターン」の場合、「今回の話し合いは意見が分かれて対立する場面もありそうなので、まずは十分に【土台の設置】をして、前提になる情報を共有しよう。出てきた意見は【意見の外在化】で視覚化して、冷静に話し合える【雰囲気作り】をするようにしよう」などのように、複数のパターンを選び取りながら、その状況に応じた「よい」言語活動の姿を構想 (あるいは省察) することができる。

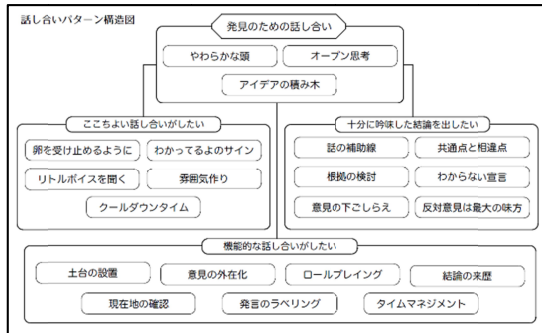


図2 「話し合いパターン」構造図

特定の方法を絶対的によい方法とするのではなく、ある価値観やある状況におけるよい出来事のあり方を表現する点が、パターンランゲージの大きな特徴である。課題解決方略はいついかなるときでも有効な方法ではなく、使用者が適切に判断して調整しながら用いなくてはならない。出来事のパッケージとして記述することによって、学習者自身が自分の経験した 出来事 と比べながら読むことを可能にすることで、批判的な読み方を惹起することができる。

(2) 課題解決方略の記述

本研究では、課題解決方略の記述として、国語教育の各分野を対象として、以下のパターンランゲージの作成を行った。

話し合いパターン

話し合いパターンは、「発見のための話し合い」を実現するためのパターンランゲージとして作成した。

話し合いパターン (小学生用)

上記の話し合いパターンを、小学4年生以上を対象として再構成したものの。

漢字学習のためのパターンランゲージ

漢字学習のためのパターンランゲージは、「言葉を知る旅」を実現するためのパターンランゲージとして作成した。

アカデミックライティングパターン

大学生を対象に、アカデミックライティングのための課題解決方略を表現するためのパターンランゲージとして作成した。

国語科授業デザインパターン

教員養成課程の学生や教員を対象に、国語科の授業をデザインする際に用いる方略を表現するためのパターンランゲージとして作成した。

これらの記述を行う過程では、パターンランゲージの記述方法の定式についても検討を行った。当初の定式では、[問題]を[解決]する構造を表現していたが、先にみた通り、出来事 を起こすことを表現する記述モデルに変更した結果、[問題]を含めた環境・状況をもとに、[解決]を行う構造へと改めた。

また、の小学生用のパターンランゲージにおいては、上述の 出来事 の記述モデルであることはそのままに、一部に会話形式の表現方法を用い、環境・状況についての分析をもとに課題解決方略を選び取る形式を表現した。

08
うなずきがあるだけでも

わかってるよのサイン

でも、こういうところでこまってる

話をしている人が、話しにくそうにしてるよ。

どうしてこうなってしまうのだろう？

聞いている人につたわっているかわからないから、ふあんになってるんじゃないかな。

集中して話を聞いていると、ついつい反応するのをわすれることがあるかもしれないね。

ヒント 聞いている人が反応してしてくれると、ちょっと安心しますね。

じゃあ、こうしてみよう

あなたの話を聞いてるよ、という わかってるよのサインを送るようにすればいいのかな。

具体的には
・話している感じがわからなかったら、うなずいたり、あいづちを入れたりしてみよう。
・わかりにくいところでは、少し声をかきあげ、わからなかったというサインを出してみよう。

あわせてどうぞ：07 受け止めろしせい、18 わからない所、

図3 話し合いのための言葉コレクション【わかってるよのサイン】

(3) 記述した課題解決方略を活用した実践とその考察

パターンランゲージを活用した話し合いに関する知識の創造を支援する実践

学習者が課題解決方略を身につける際には、ただ伝達されてそれを身につけるのではなく、知識の創造過程を経る必要がある。香川秀太[2011]はこのことを次のように述べていた。

省察を通して、実践知は(ありのままではなく 特殊な形で)自覚化(構成)され、その自覚されるポイントも内容も熟達過程で変化していく。省察が、脳内に「既にあるもの」として存在する知識の単なる「表現」ではなく、むしろ知識の能動的な構成だということは、省察とは、新たな独自の知の「創造」を意味する。(p. 65)

このことから、課題解決方略を身につけるためには、言語活動において起こる 出来事 についての省察が必要であると考えられる。

省察を支援する方法については、奈田哲也・丸野俊一[2009]や古閑晶子[2013]において、他者との対話が有効だとされている。そこで、本研究ではパターンランゲージを対話の媒介として位置づけ、これを媒介として話し合いについての対話を行うことが、話し合いに関する課題解決方略についての省察に資することを検討した。

【実践の方法】

対象：A 大学2～4年生 40名

1 話し合いパターンを読ませ、その[問題]および[解決]について、経験の有無などを記述させる「プレ調査」を実施する。

2 3人～4人のグループに分け、「これまでの話し合いにおいて苦労してきたこと・工夫してきたこと」について話し合いを行わせる。メンバーを入れ替え、話し合いは20分を2回実施する。

3 2の終了後、自己省察を行わせる。

実践の結果については、話し合いのデータとともに学習者へのインタビューを行うことでその有効性の検証を行った。

インタビューデータを SCAT 法で分析した結果、対象の学習者は、1度目の話し合いでは「共感をベースとした話し合い」を経験し、2度目の話し合いでは「反論と検討をベースとした話し合い」を経験しており、特に後者において方略についての認識の変化を自覚していることが明らかになった。

このことをもとに話し合いのデータについて検討した結果、いくつかのグループで、意見の対立が見られ、そのことによって方略への認識が深まり、省察が起こっていることを観察することができた。

このことから、パターンランゲージを活用した話し合いに関する知識の創造支援は有効であると考えられた。また、特に意見の対立を起こしやすくすることによって、その有効性を高めることができると考えられた。

本実践以降、同様の実践を行う際には、プレ調査の結果をもとに意見の対立が起こりやすいグループ編成を行うことで、省察を支援するようにした。

パターンランゲージを活用した漢字学習に関する知識の創造を支援する実践

においては、言語行為についての課題解決方略を対象とした。では、言語行為の中でもとりわけ学習行為に着目し、そこで用いられる課題解決方略＝学習方略の省察にパターンランゲージが機能するかどうかを検証した。

国語教育の中でも漢字学習は学習方略の習得が重要であるとされる。棚橋尚子[2015]は、「国語教育における漢字指導は、究極的には「自立して漢字を習得していくことができる学習方略を身につけさせること」が核心となる」(p.24)と述べるが、その習得の支援は十分に行われているわけではない。

そこで、漢字学習のためのパターンランゲージを記述し、漢字学習についての学習方略（およびその背景にある漢字学習観）について意識化することをねらいとした教育実践を行った。

主な方法は、で述べた話し合いパターンを用いた対話のワークと同様である。

このワークでは、話し合いパターンを用いた対話のワークで得た知見に従い、意見の対立が起こりやすいグループ構成を行った。その際、意見の対立の中心となるパターンとして、【アートとしての漢字】【あえてひらがなで】【私のための筆順】というパターンを軸においた。これらは、そのタイトルが示すとおり、通常の漢字学習観とはやや異なる性質を持つパターンである。「漢字は正確な形で書かなければならない」「漢字で書ける言葉はできるだけ漢字で書いたほうがよい」「筆順には正解がある」という信念を揺さぶるものであり、プレ調査においても批判的に捉える学習者が多かったことから、省察に資するものと仮説を立て、実践した。

分析は話し合いのデータを対象にして行った。【私のための筆順】を対象として対話においては、予想通り、正しいとされている筆順から逸脱することの懸念が示されたが、一方で、左手書字の問題や筆順が「人の目を気にする」ものになっていることへの気付きが見られ、筆順をめぐる漢字学習観への省察が見られた。

このことから、パターンランゲージによる記述は、学習方略を学習観と接続しながら省察させる点においても有効であると考えられた。

その他の実践

本研究では、作成したパターンランゲージを用いて、以外にも様々な実践を実施した。

話し合いパターンは、2014年度の教員免許状更新講習において活用し、小学校・中学校の教員の話し合いについての省察を支援する教材として活用した。同講習においては、教員らにワークショップとして、「グループ

ワークのためのパターンランゲージ」の作成・発表の活動を実施し、知識の記述実践も行った。

アカデミックライティングパターンは、2014年度・2015年度の教養科目「アカデミックライティング」において、受講生に教材として配布した。これは各回の教育内容について明示する役割を果たすとともに、各回の教育内容を後半のレポート作成場面において活用するためのツールとして機能した。

国語科授業デザインパターンは、教育実習のプレ授業において配布し、教育実習の授業デザインを支援するツールとした。また、実習前と実習後に同パターンを用いた調査を行い、その結果に基づいた対話のワークを、教育実習後に実施した。このワークでは、学習者が【ねがいの羅針盤】や【ふりかえりエンジン】などのタイトルの任意のパターンをもとに教育実習の経験について省察し、教育実践についての知見を言語化した。省察のツールとともに、教育実習など長期的な活動の成果について、質的な面から評価するツールとしての有効性を確認することができた。

また、国語科授業デザインパターンは、2015年度の教員免許状更新講習においても活用した。同講習では、小学校・中学校・高等学校の教員の授業経験と授業観についての交流・省察を支援するツールとして用いた。

本研究の成果は、以上のように、国語教育における課題解決方略について、その記述方法を定式化すること、言語行為・学習行為・授業デザインなど、幅広い対象を記述し、それを用いた省察の実践を開発できた点にある。

引用文献

- 岩川直樹[2005]「教育における「力」の脱構築」(久富義久・田中孝彦【編著】『希望をつむぐ学力』明石書店)
- 岩川直樹[2008]「コミュニケーションと教育」(『教育』58、国土社)
- 香川秀太[2011]「実践知と形式知，単一状況と複数状況，分析と介入，そして質と量との越境的対話」(『質的心理学フォーラム』、日本質的心理学会)
- 古閑晶子[2013]「対話を核とする学習過程デザインの要件」(『国語科教育』73、全国大学国語教育学会)
- 住田勝[2013]「読むことの学習・学習者研究」(全国大学国語教育学会【編】『国語科教育学研究の成果と展望』明治図書)
- 棚橋尚子[2015]「学習方略を身につけさせることのできる漢字指導を目指して」(『日本語学』34-5、明治書院)
- 奈田哲也・丸野俊一[2009]「他者との協同構成過程での知的方略の内面化はいかにしたら促進されるか」(『発達心理学研究』20、日本発達心理学会)

- 藤原顕 [1989] 「『言語技術教育』を論じるための 基本的枠組みについて」(『両輪』19、両輪の会)
- 松友一雄 [2013] 「言語パフォーマンス能力の質を捉える理論的枠組に関する研究」(『国語国文学』52、福井大学言語文化学会)

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計4件)

富安慎吾 「国語科教科内容の記述に関する理論的検討：出来事 という観点を導入して」(『国語科教育』79、全国大学国語教育学会、2016、47-54) 査読有

富安慎吾 「国語教育のためのパターンランゲージについての考察：理念を実現するための形式の検討(1)」(『島根大学教育学部紀要・教育科学・人文・社会科学・自然科学』48 別冊、島根大学、2015、19-29) 査読無
<http://ir.lib.shimane-u.ac.jp/metadata/31474>

富安慎吾 「国語学習における知識の創造を媒介するメディアについての検討：対話メディアとしてのパターンランゲージの検討を中心に」(『国語科教育』75、全国大学国語教育学会、2014、80-87) 査読有
<http://ci.nii.ac.jp/naid/110009816888>

富安慎吾 「知識の創造に資する方略記述実践についての検討：パターンランゲージという方法を中心に」(『国語科教育』74、全国大学国語教育学会、2013、30-37) 査読有
<http://ci.nii.ac.jp/naid/110009664907>

[学会発表](計5件)

富安慎吾 「パターンランゲージを用いた国語科教科内容の記述に関する研究:文化の記述という観点から」(全国大学国語教育学会、創価大学、2015.10.24)

富安慎吾 「学習観についての省察をうながす試み：漢字学習のためのパターンランゲージを用いて」(全国大学国語教育学会、姫路商工会議所、2015.5.31)

富安慎吾 「できごとと方略との関係を語るためのメディアについての試行：パターンランゲージを用いた振り返りワークの検討を中心に」(全国大学国語教育学会、筑波大学、2014.11.9)

富安慎吾 「方略を支える信念を問題にすることの意義についての考察：パターンランゲージの検討を通して」(全国大学国語教育学会、広島大学、2013.10.27)

富安慎吾 「パターンランゲージによる方略記述実践の可能性：メディアとしての方略記述について」(全国大学国語教育学会、弘前大学、2013.5.19)

[その他]

「話し合いのための言葉コレクション」
(小学生用の冊子)

http://www.evernote.com/I/AAtEnBcdoxNHp7_M7up4SLcpb7RoPGIFBdA/

6. 研究組織

(1)研究代表者

富安 慎吾 (TOMIYASU, Shingo)

島根大学・教育学部・准教授

研究者番号：40534300